

鹿大ジャーナル

KADAI JOURNAL

<http://www.kagoshima-u.ac.jp/>

特集

新学長に聞く

吉田浩己新学長就任

本学のニードな研究紹介

「焼酎粕コンクリート」で
環境にやさしいタコつぼ・魚礁の開発

鹿大の新たな試み

鹿児島島の中に世界をみる教養科目群の構築
地域マスコミと連携した総合的キャリア教育

アラムナイ追跡隊
作家エーゼント 鬼塚 忠さん

輝く鹿大生

溝手 克弥さん

鹿大見てある紀

鹿児島大学東京リエゾンオフィス

なんでも情報版「みみずく」

「離島へき地医療を支える総合小児科医養成」プログラムが採択
かごしまルネッサンスアカデミーが開講 ほか



[特集]

新学長に聞く

～吉田浩己新学長就任～

平成19年1月、鹿児島大学長に吉田浩己氏が就任した。
学長就任にあたっての抱負や新体制のもとで
さらに飛躍しようとする鹿児島大学の将来像、
地域や鹿大生に対するメッセージなどについて、
就任早々の吉田学長に語ってもらった。

新学長に聞く

～吉田浩己新学長就任～



学長室で行われたインタビューの様子。中央机上にあるのは鹿児島大学のブランド焼酎

**学生が成長を実感できる
大学であることが基本**

中島学長補佐 学長に就任されてはじめての『鹿大ジャーナル』のインタビューということで、今日はさまざまな観点からおうかがいし

たいと思います。まずは新学長としての今後の抱負についてお聞かせください。

吉田学長 鹿大はここ数年間、法人化の動きの中で、試行錯誤の時期が続いてきました。経営の改善のためには民間的経営手法を取り入れ、トップダウン方式で決断を

伝達して効率を上げるということが盛んに言われた。しかし、法人化後の新たな取り組みが、大学の使命である教育・研究・社会貢献の活性化に、有効であったのかどうかについては、教職員の中に不安がありました。また、法人化によって多くのことを同時に変えたために、歪みが出たところもあります。

私は、ここ半年か一年は、教職員が大学について真剣に考えた時期だったと思います。そういった模索の時期に学長に選ばれたことで、教職員は本学の使命を果たし、国民や県民から信頼される存在にしたいと切望していることを強く実感しています。期待を裏切つてはいけなさと、責任を感じているところです。

何よりも大学は教育機関なので、学生・大学院生が成長していることが実感できるような大学にすることが基本です。学生が、物事を真

摯に受けとめ、明るく真面目に考える雰囲気や全面に出てくるような大学にしたいと考えています。

鹿児島大学をアピールする ブランドデザインを創る

中島 学長ご自身も鹿大の卒業生でいらっしやいますが、何が鹿大の魅力であるとお考えでしょうか。また、それをどうアピールしたら良いと思われませんか。

吉田 まずは、鹿大が8学部9大学院研究科をもつ総合大学であるということですね。鹿大は、多彩な分野で教育・研究や社会貢献を行っています。多彩な知があふれる場所です。多岐にわたる分野で勉強できるわけですから、鹿大生はとても幸せじゃないかなと思います。

もう一つは、鹿児島という地。鹿児島が、明治維新の時期に、日本の近代化のために重要な役割を果たした人たちが生まれ育った土地であり、豊かな自然と文化にも恵まれており、教育や研究の素材には事欠きません。

島嶼(とうしよ)地域などにもたいへんな魅力があります。たとえば、奄美大島には長寿や子宝といった

誇るべき特色があります。その特色を鹿大が研究し、成果を普遍的なレベルにまで高めることができれば、奄美にだけじゃなく、国際的にも貢献ができる。鹿児島という地そのものを生かした知の拠点をつくるのが、鹿大の基本的なコンセンサスだと思います。

それらを踏まえて、これからの「鹿児島大学のブランドデザイン」をつくり上げたいと考えています。「大学憲章」などといった名前をつけて、鹿大がどのような考えのもとに、どのような教育や研究、社会貢献を進めていくかを、平易な言葉でわかりやすく整理する必要があります。

それを見れば、鹿大の構成員誰もが、鹿大の進むべき方向を理解できるし、社会にも鹿大が何をやっていけるかがわかり、関心をもつていただける。大学全体として力を入れるべき「大きな柱」を整理して、社会にアピールしていきたいと思っています。

ブランドデザインを大学全体で共有すれば一体感が生まれ、学生や教職員の自信にもつながります。学内の意見を聞きながら今までの取り組みをもう一度見直し、今の時期に合った形で進めていければと思います。

鹿児島でなければ
できない研究で最先端に

中島 大学の使命である教育や研究、地域貢献についての現在の問題点、それを今後、どのようなやり方でどう変えていくかという具体的な戦略について、お話しいただけますか。

インタビューを務めたのは、
広報誌等編集専門部会長でもある
中島あや子学長補佐(広報
担当)・法文学部教授



吉田 大学の教育には、専門教育

と共通教育がありますが、私がま

ず取りかかりたいのは、共通教育。

物事はある一面だけではなく、多

面的な物事の組み立てで決まると

いうことを勉強する場として共通

教育は大切です。共通教育を充実

するためには、部局等が応分の分

担に責任を持つことと、どのよう

な分野の教員であつても、必ず共

通教育には関わることを原則にし

ます。学生が成長するために多彩

な分野を勉強させることが必要、

という姿勢で共通教育の基盤をつ

くりたいと思っています。

研究については、基礎的な研究

を重視し、先端的な応用研究を推

進し、両者が融合した先導的・独創

的な新しい学問の創出にも挑みま

す。また地域の特徴を生かした研

究を重点分野と位置づけ、その成

果を教育、生涯教育や社会連携な

どを通じて還元します。特に鹿児

島という地でしかできない研究に

ついて、鹿大はその最先端になる

必要があります。今、個々の教員で

進められている研究の情報を早速

に集約して、鹿大の地域に根ざし

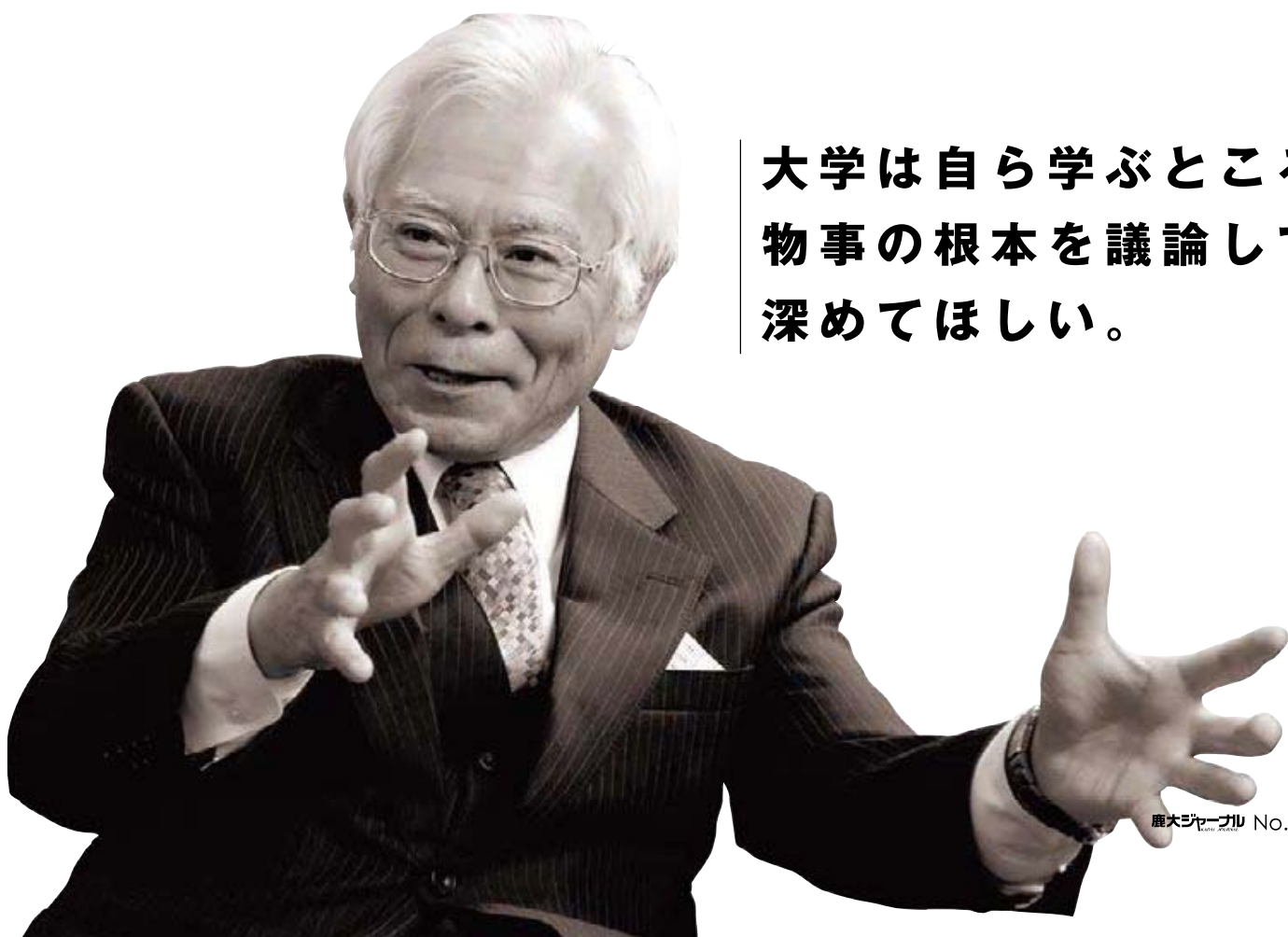
た研究をどのように発展させるか

を検討します。場合によっては、第

三者を入れて検討してもいいかも

しません。

大学は自ら学ぶところ。
物事の根本を議論して
深めてほしい。



【特集】

新学長に聞く

～吉田浩己新学長就任～

教育・研究・社会貢献の現状が客観的にわかるシステムを整備します。

中島 鹿児島県の地域性を、あらゆる面において追究しようということですね。今おっしゃったことを実現させるためには、どのように大学運営を行っていかれるか。お考えをお聞かせください。

吉田 今、大学に民間的な経営手法を取り入れよ、ということが盛んにいわれていますが、企業経営と大学経営とも、現場を重視する点では、共通していると思います。企業においては、部門ごといい商品をつくって利潤が上がっているかどうかが大切。大学の場合には、現場の部局等で、より質の高い教育・研究と社会貢献を行うことが経営の目的です。経営目的を達成するためには、学部や大学院などの教育・研究・社会貢献の活性化状況を、現場のリーダーである部局長や全体の責任者である学長が、つねに正確に把握できることが不可欠です。

19年度に行われる、本学の中期目標・計画の達成度に対する評価では教育・研究の実績が求められます。また事実に基づいたデータがなければ、評価の対象にもなりませんし、実績を上げるための改善ができません。したがって自己点検評価システムを早急に機動

させることを検討しようと思っています。

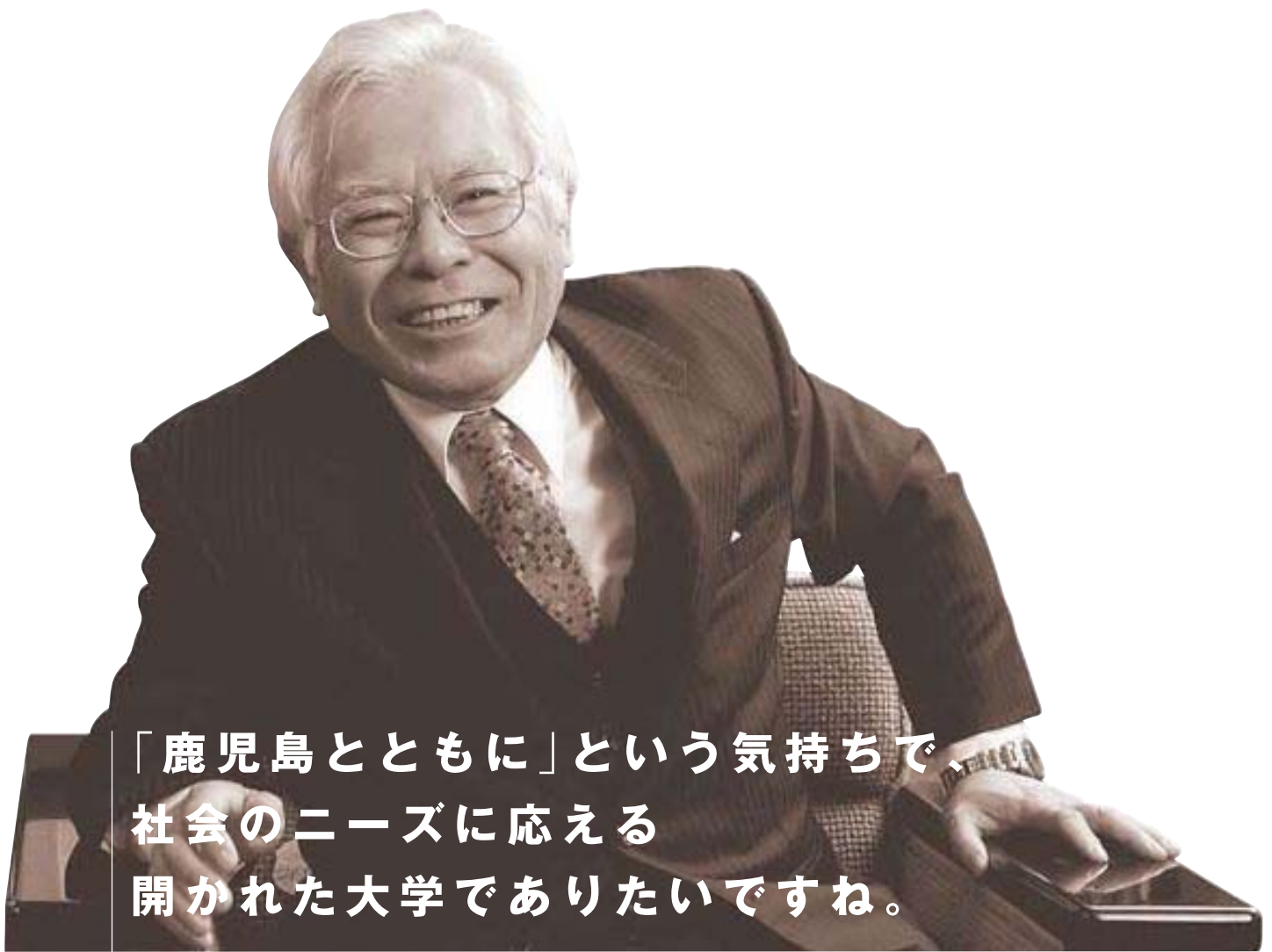
中島 確かにそういったシステムは必要ですね。

吉田 鹿児島大学では、8学部9大学院を基本組織として教育・研究・社会貢献が展開されています。したがって、学部や大学院研究科等の現場を尊重し、各部局に困難が生じている場合には全体として援助することが大学運営の基本となります。

こうした意味と、現場に責任を持つていただくために、大学運営会議に部局長等を入れます。教育研究の活性化と大学の改革には、教職員、英知を結集してあたる必要があります。現場の意見を採用入れて物事を進めていきたいと考えています。

多彩な価値観に出会い 幅広く学んでほしい

中島 『鹿大ジャーナル』の読者でもある、地域の住民や企業の方々に対するメッセージをお願いします。



「鹿児島とともに」という気持ちで、
社会のニーズに応える
開かれた大学でありたいですね。

吉田 鹿児島大学は「鹿児島に根ざした知の拠点でありたい」と考えています。

今までも、たとえば、奄美大島など、鹿児島県の島嶼地域に関する諸課題を取り上げ、多島圏研究センターや国際島嶼医療学講座等を設置し、その解決に取り組み、その成果を教育・研究に生かし、地域の発展に寄与してきました。鹿児島をテーマとした事柄については、鹿大も責任の一端をもって推進させていきます。

鹿児島大学は「鹿児島とともに」という気持ちで、鹿児島のいろいろな課題を自分のこととして受けとめるという姿勢をもっておりますので、遠慮なく相談していただきたい。鹿大に問題を投げかけ、大学の能力をどしどし活用してほしい。柔軟に社会のニーズに応じていける存在でありたいと思っています。

また、鹿児島大学には市民の方も利用できる図書館や博物館、植物園などがあります。本学をいこの場として、市民の皆様が気楽に構内に入って楽しみ、学んでいただけるような、開かれた学園づくりをしたいとも考えています。

中島 新入生を含めた鹿大生に対

しては、学生生活でどのようなことに力を入れてほしいと考えていますか。

吉田 冒頭の話と少し重なりますが、やはり、学生の本分は「学ぶこと」です。授業だけでなく、サークル活動などを通して、人生観や世代の異なる人とでも、一緒に物事を進めることができるということ学ぶのも大切です。

幅広く、奥深く学ぶということに関しては、鹿児島大学は総合大学だから、最適な場だと思えますよ。「知」というものがいかに多彩かということ、鹿大の中では体験できます。幅広く学んで、豊かな人生観をつくってほしいですね。

私が学生のころの鹿大は、設備にしても何にしても、今より貧弱だった。でも、学生生活は豊かでしたよ。「大学では学生が自ら学ばなければいけない」という雰囲気がありました。自分の生きがいや進路についてどれだけ深く極めるか、というのが若者の特権と思っていたんです。当時は、学生同士でも、物事の根本的なことについて意見交換を盛んにやりました。授業だけを重視するのではなく、遊ぶときには遊びましたし、本もたくさん

新学長に聞く

～吉田浩己新学長就任～

ん読みました。学生生活においては、「自ら学ぶ」という観点が大事だと思います。

大学は社会が望むことを的確につかむことが大切

中島 学長がこれから、全学部を回られるという話をお聞きしました。学長自らが学部と関わる、その意図をお聞かせください。

吉田 大学運営にあたっては、全体を把握した上で練り上げた方針を示さなければ説得力がないと考えています。まず、今年の1月から3月にかけて行う部局等からの概算要求についてのヒアリングの際、すべての部局長に対して部局の教育・研究についての理念や現状と将来構想についても伺います。さらにその後部局等を回り、それぞれの教授会等で直接に意見等を伺いたいと思っています。

中島 大学の運営には、各部局を尊重するだけでなく、学長のリーダーシップも必要だと思います。その二つをどう両立させようとお考えでしょうか。

吉田 たとえば、全学のコンセンサスが必要なミッションに関しては、新たに副学長を置きます。それについての部局間での交渉や調整を、副学長がやるわけです。

学長がリーダーシップをとらなければならぬのはもちろんですが、全学のコンセンサスを得るまでに時間がかかる問題については、副学長を責任者とする全学的な特任委員会を設置して、まとめたいと考えています。一口にリーダーシップといっても、忍耐強くリーダーシップを発揮する場合と、私が即断せざるをえない場合が出てくるだろうと思います。

中島 学外有識者で構成される「学長諮問会議」を新たに設置されるそうですね。経営協議会も学外有識者と役員から成る組織ですが、学長諮問会議とどのように違うのでしょうか。

吉田 法人化後から設置されている経営協議会は、大学の基本組織として、予算などの日常的な経営に関わる重要事項について定期的に審議します。そこに学外有識者の意見が反映されることは、大変重要です。相当踏み込んで相談し

ても、応えてくれる方々として信頼しています。

新しく設置する学長諮問会議は、「学長のブレイン」です。社会からの助言をいただいで、それを大学運営やブランドデザインの構築に生かすのがねらいです。

大学は社会が何を望んでいるのかを的確につかむことが大切です。また、地域社会の意見を取り上げなければ、地域社会からも「自分たちが支えている大学だ」という気持ちで支援していただけたらと思います。大学に対する不満が出てくるかもしれませんが、それも受け止めたい。そうすることで、産学官の信頼関係が形成されてくると思います。

構成員は県内の有識者が中心で



顧問を務めていた医学部卓球部の学生と

すが、日本の高等教育がどうあるべきか、という点からも意見をいただくために、県外からも入っていただくつもりです。

学長諮問会議は、大学の経営組織ではないわけです。その分、鹿大に対する忌憚のない意見を、より自由な立場でとしどしお話しただけの場になります。鹿児島大学の将来構想等、より中長期的な事案に関するブレインになってもらい、本学を支援してもらえ存在となることを期待しています。

中島 本日は長時間にわたり、ありがとうございました。
(平成19年1月17日取材)

吉田浩己(よしだ・ひろき)

昭和19年、福岡県久留米市生まれ。昭和49年、鹿児島大学大学院医学研究科単位修得後、愛媛大学医学部助手、助教授を経て、昭和58年9月より鹿児島大学医学部教授。平成3年4月医学部附属動物実験施設長、平成12年10月医学部医学科長、平成15年2月医学部長、同4月医歯学総合研究科長等を歴任。平成19年1月12日より、国立大学法人鹿児島大学学長。趣味は絵画。近年は絵を描く時間が取れないため、写真撮影が新たな楽しみに。息子2人は独立し、共働きの夫人、母親と暮らす。多忙な毎日の中、2匹の飼い猫に朝晩エサをやるのが日課。専門は乳がん病理学



サツマイモの甘い香りがする焼酎粕
平成17年度に発生した鹿児島県内の
焼酎粕量は48万1000トン。その3
分の1を海洋投入で処理している

焼酎の生産過程から出る

「焼酎粕」

近年、鹿児島県産の芋焼酎が全国で人気を集め、その生産量が伸びている。生産量の増加は、焼酎メーカーにとって喜ばしいこと。しかし、生産過程で出る「焼酎粕」の処理に、メーカーは頭を悩ませている。

焼酎粕は、95%の水分のほか、タンパク質やアミノ酸、ミネラル、ビタミンE、食物繊維などを含む食品産業廃棄物だ。芋焼酎の場合、できあがった焼酎量の約2倍もの粕が出る。これまでは、家畜の飼料や肥料への再利用、海洋投入などによって処理してきたが、法律の改正により、平成19年4月から焼酎粕の海洋投入は原則全面禁止となる。

現在、鹿大の農学部や水産学部で、焼酎粕の再利用に関する研究が進められている。なかでも、水産

本学のニーツは研究紹介

「焼酎粕コンクリート」で環境にやさしいタコつぼ・魚礁の開発

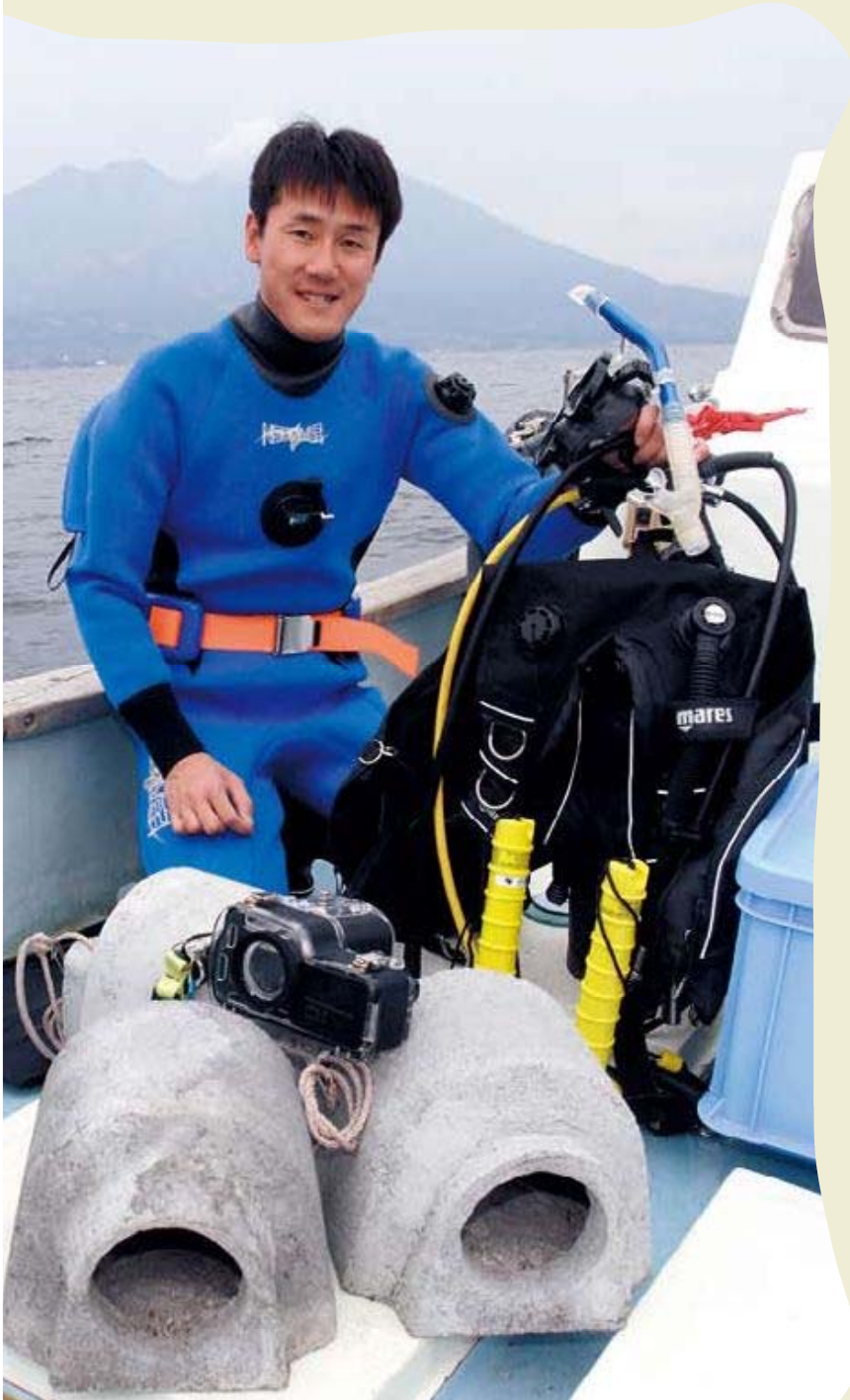
芋焼酎の生産過程で発生する「焼酎粕」。芋焼酎の生産量とともに増え続けている焼酎粕は、さまざまな観点から再利用の研究が進められている。水産学部の江幡恵吾助手は、焼酎粕を混ぜたコンクリートを用いて、環境にやさしいタコつぼや魚礁の実用化を目指している。

水産学部水産学科漁業基礎工学講座 助手

江幡恵吾

えばた・けいご

昭和48年富山県高岡市生まれ。平成10年北海道大学大学院水産学研究科修士課程漁業学専攻修了。同年4月から翌年11月まで北海道漁業協同組合連合会に勤務。平成12年12月から鹿児島大学水産学部助手。専門は漁具設計、漁場造成。水産学部の教員らと結成した、錦江湾研究会に所属。NPO法人エコライフ鹿児島理事



学部の江幡恵吾助手による「焼酎粕コンクリート」の研究は、焼酎粕の新しい再利用法として注目を集めている。

焼酎粕コンクリートの開発

焼酎粕コンクリートは平成15年12月、江幡助手が鹿児島県農業大学校の川井田博氏（現在、鹿児島県始良農業改良普及センター）から「セメントと焼酎粕を混ぜたら固まった。水産現場で応用できないだろ

うか」という相談を受けたことから開発が始まったものだ。

通常のコンクリートは、セメントに砂や砂利、水を混ぜてつくるが、焼酎粕コンクリートは水の代わりに焼酎粕を使う。既存の設備で焼酎粕をそのまま使用して製造できるため、低コストという利点がある。研究当初は強度が弱いという難点があったが、鹿児島共和コンクリート工業と八光工業の協力でパルプ廃液を原料とした添加剤を加え、従来のコンクリートと

同程度の強度をもたせることに成功した。

産卵用タコつぼやトコブシ用魚礁に応用

現在、江幡助手は鹿児島共和コンクリート工業や八光工業、県内の漁協などと協力し、焼酎粕コンクリート製の産卵用タコつぼや魚礁の実用化を目指している。

鹿児島湾にタコつぼを沈めた実証実験では、実際にタコが産卵し、卵の孵化も確認した。従来のプラスチック製タコつぼと異なり、焼酎粕コンクリート製のタコつぼは、設計を工夫すれば産卵や孵化という役目を終えた後に崩壊し、自然にかえすことも可能と江幡助手らはみている。

種子島では、漁獲量が年々減少しているトコブシ（貝の一種）を増やすための魚礁を設置し、実証実験を行っている。コンクリート製と焼酎粕コンクリート製、石炭灰製の魚礁にそれぞれトコブシの稚貝を附着させ、魚礁の種類によってトコブシの数に差が出るかどうか、観察を続けている。焼酎粕の成分によってトコブシを誘引し、焼酎粕コンクリートに附着するバクテリアの水質浄化作用がトコブシ

にとつての良い生育環境となるのでは、と江幡助手らは期待を寄せている。

「焼酎粕は「かす」ではなく「宝の山」

江幡助手らは、焼酎粕に含まれる成分によって焼酎粕コンクリートにバクテリアや海藻が附着しやすくなり、それらが周辺の水質を浄化するのではないかとという仮説も立てている。今後は、焼酎粕コンクリートから海水中に溶け出す成分、附着しやすいバクテリアや海藻の種類を特定し、それらが環境や生物に与える影響をさらに詳しく調べる。タコつぼや魚礁としての有効性や安全性を裏付けるデータを提示し、実用化に拍車をかけたい考えだ。

「焼酎粕は『かす』ではなく、『宝の山』。焼酎粕コンクリートは、魚礁以外にも河川・護岸の工事などにも活用できると思う」と江幡助手。昨年は、焼酎粕コンクリート製ブロックを川に沈めて水草を附着させ、ホタルの棲み家として利用しようという試みも始まった。焼酎粕が鹿児島生まれの新材料としてさまざまな場面で利用される日は、そう遠くはなさそうだ。



マダコの幼生(赤ちゃん)



鹿児島湾に沈めた焼酎粕コンクリート製タコつぼの潜水調査を行ったところ、マダコがタコつぼの中で産卵しており、その孵化も観察することができた



焼酎粕コンクリートでつくった産卵用のタコつぼ



焼酎粕コンクリートでつくったトコブシ魚礁狭いところを好むトコブシの習性を利用し、魚礁に凹凸をつけ、常に海底と魚礁との間にすきまができるよう工夫している

トコブシが附着した、焼酎粕コンクリート製のトコブシ用魚礁



与論島のサトウキビ畑

美山の里、沈寿官窯訪問

学習連絡シート (minute paper)

鹿大の新たな試み
Challenges of
Kagoshima
University

平成18年度 文部科学省 「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」 鹿児島の中に世界をみる教養科目群の構築

大学を選びさえしなければ入学希望者全員が大学に入学できる「大学全入時代」に突入した。法人化された鹿児島大学も生き残りを賭けさまざまな教育改革に取り組んでいるが、その中から教養教育改革を紹介する。

平成18年8月、文部科学省の平成18年度「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)^{*1}」の審査結果が発表され、鹿児島大学教育センター(教育センター長・根建心具教授)が取り組んでいる「鹿児島の中に世界をみる教養科目群の構築」も採択された。平成18年度は全国の国公私立大学から331件の申請があり、そのうち48件が採択された。採択率は14.5%。

「鹿児島探訪」

平成17年度に本格的に始まったこの取り組みは、鹿児島大学がそれまでに長年実施してきた、鹿児島の自然・政治・経済・文化・歴史などに對する地域研究(鹿児島学)の知見を教養教育科目に反映させることを目的としている。

この取組は主に鹿児島探訪「講義シリーズ」と鹿児島探訪「体験シリーズ」からなっている。

「講義シリーズ」では、鹿児島という地域の中にある自然・文化・産業・離島をテーマに、地域の事象や問題が世界のそれとどのように関連し合っているのかを学び、これらの講義を通して、地域の事象や問題に内在する本質を見抜く力を養成する。

「体験シリーズ」では、「講義シ

リーズ」で取り上げた個々の事象が、相互に関連し合いながら地域の中でのように具現化されるのかを体験活動を通して体得する。

平成17年度、「講義シリーズ」では「鹿児島探訪―自然―」、「鹿児島探訪―考古と歴史―」、「鹿児島探訪―文化―」、「鹿児島探訪―地域産業―」の4科目が開講され、「体験シリーズ」では「島のしくみ(与論島)」の1科目が開講された。

「自然」の授業では、地球規模の環境と生命の共進化を鹿児島島の地質や亜熱帯・温帯境界の希少生物から考えさせ、「考古」の授業では、鹿児島島の石器、縄文、弥生、古墳文化や江戸薩摩焼の先に見える世界文明発達史を認識させてきた。薩摩焼や大島紬、鹿児島島の伝統行事については、長年伝統を守るために人生を賭けてきた専門的職業人に講師を依頼し、「郷土に生きる」視点から講義を行った。

「体験シリーズ」の「島のしくみ(与論島)」では、自然、植生、教育、地方自治、離島経済、離島医療を総合的に学ぶことに重点を置き、自主性を引き出すために学生に計画立案に参加させた。

この取組では、「地域という素材を使って学生が『鹿児島の中に世界をみる』あるいは『鹿児島から地

*1 特色GP

大学の特色を生かした注目すべき教育活動を支援するプログラム。

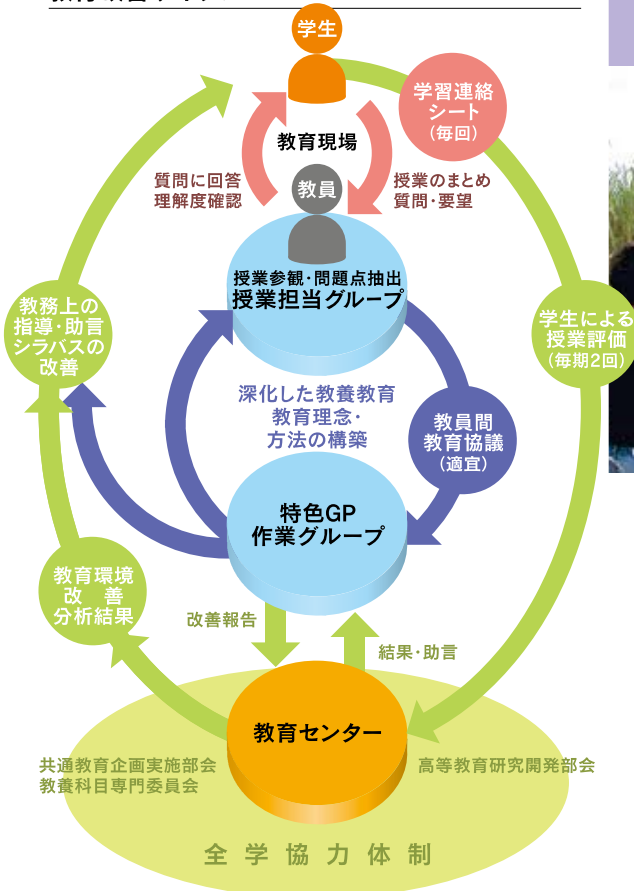
平成18年度「鹿児島の中に世界をみる教養科目群」の構成

- | 鹿児島探訪「講義シリーズ」 | 鹿児島探訪「体験シリーズ」 |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ●鹿児島探訪—自然— ●鹿児島探訪—考古— ●鹿児島探訪—歴史— ●鹿児島探訪—文化— ●鹿児島探訪—離島対策— ●鹿児島探訪—地域産業— | <ul style="list-style-type: none"> ●ボランティア活動に学ぶ ●玉里文庫に学ぶ ●島のしくみ(与論島) ●鹿児島の四季:キャンパス俳句会 ●種子島の自然と人々 ●奄美大島の自然と人々 ●自然体験活動入門講座(高隈の森の中で学ぶ) ●海へ出よう |

平成18年度「鹿児島探訪—文化—」(講義シリーズ)の授業計画

1	10月 4日	法 文	木部 暢子	鹿児島島の方言
2	10月 11日	法 文		
3	10月 18日	法 文		
4	10月 25日	非常勤	松原 武実	奄美シマウタへの招待
5	11月 1日	非常勤		鹿児島島の十五夜行事
6	11月 8日	非常勤	有馬 英子	鹿児島島の民話
7	11月 15日	非常勤		
8	11月 22日	教 育	下原 美保	薩摩藩の画事について
9	11月 29日	教 育		
10	12月 6日	非常勤	淵脇 護	かごしまの俳句
11-1	12月 13日	非常勤	沈寿官	薩摩焼
11-2	12月 16日	非常勤		美山の里、沈寿官窯訪問
12	1月 10日	非常勤	藤 茂喜	大島紬
13	1月 17日	非常勤	濱田 雄一郎	郷中教育と焼酎
14	1月 24日	非常勤	村山 輝志	示現流

教育改善サイクル



この取組では教育効果をあげるためにさまざまな工夫がこらされている。

学生は毎回授業の最後に「学習連絡シート(minute paper)」に授業のまとめと質問や疑問を書いて提出する。教員は学生の理解度をチェックし、質問や疑問に毎回答え、授業の双方向きを高める。

学期のうち中間と期末には学生による授業評価が行われる。

教員は「特色GP作業グループ」を組織し、積極的なFD活動を行う。PDCAサイクルを活用して教育目標の共有化と教育内容の改善・深化を実現していく。

教育センターでは情報の共有を図るために教育センターのホーム

球を覗く「能力を育み、物事の本質を理解する能力を育むことで、地域に貢献できる人材としてだけでなく、国際的にも貢献できる21世紀型地球市民へと成長していくことを期待しています」と根建教育センター長は話す。

受講した学生や社会人の反響は大変良く、担当教員からは「講義をして楽しかった」という反応が多い。新聞でも取り上げられ社会的に注目された。

教育効果をあげるための工夫

講義の一部は既に音声をホームページで聞くことができるが、講義内容は「鹿児島探訪」専用のマルチメディア・サーバーにデジタル・データベースとして蓄積するとともに、それを独自のeラーニング・コンテンツとして整備・充実していく。

この取組は、「採択理由」でも触れられているように、これまで講義中心で進められてきたが、平成18年度からは「体験学習、参加学習」を充実し、さらに「グループ学習、プロジェクト学習」等、学生の学習意欲をさらに高める取組への発展が期待されている。

ページを通して情報を流すほか、年報やニューズレターを発行して全学の教員に協力を呼びかけている。教育センターに外部評価委員会を設け、外部評価に基づく継続的改善を進める。

今後の展開

平成19年度は新たに講義シリーズとして「鹿児島探訪—鹿児島大学—」を追加して本学の歴史や伝統を学んでもらうほか、体験シリーズに「鹿児島湾の自然と人々」と「奄美の自然と織物」を開講する。平成20年度はこの取り組みについての総括を行う予定である。

*3 PDCAサイクル
質向上のための、立案(P)—実行(D)—評価(C)—是正(A)の繰り返し。

*2 FD活動
教育の質向上のために教員同士が研鑽しあう活動。



「職業人としての自分をイメージする」科目「キャリア科目」の一環として「第2回キャリア討論会」（平成19年1月23日開催）が行われた。法文学部の約200人の学生が学んだことを報告、議論し合った

鹿大の新たな試み
Challenges of
Kagoshima
University

平成18年度 文部科学省 「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP) 地域マスコミと連携した総合的キャリア教育

法文学部のキャリア教育プログラム「地域マスコミと連携した総合的キャリア教育～『地方の視点』から問題発見・解決と提言を行う人材の育成～」は、学生に就職のノウハウを教えるのではなく、社会人としての基本的な能力を身に付けさせることがねらいだ。

学部単位でのキャリア教育

近年、若者のフリーターやニートの増加が社会問題となっている。鹿児島大学では就職支援室を中心として学生に対する就職支援を行っているが、さらに平成18年度から、法文学部が学部単位での「キャリア教育」を本格的にスタートさせた。平成18年7月、文部科学省の「平成18年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)^{*2}」に採択された、法文学部の「地域マスコミと連携した総合的キャリア教育(『地方の視点』から問題発見・解決と提言を行う人材の育成)」がそれである。

キャリア教育はこれまで、学生に職業観や勤労観、職業に関する知識・技能を身に付けさせたり、主体的に職業を選択する能力を育てることを意味していた。法文学部が行うキャリア教育は、学生に物事を考える力、表現する力などを身につけさせることで、社会の問題点を発見してその解決策を考え、実践できる人材として育てるといふ、キャリア教育の新しい形だ。「就職はゴールではありません。人間として自立し、自己表現ができる学生を育てる。それが法文学部の

キャリア教育です」と木部暢子法文学部長は強調する。

特徴ある科目「マスコミ論」

このプログラムの中核となるのは、平成17年度から県内のマスコミ12社(平成18年度からは13社)と法文学部の教員とが協力して行う科目、「マスコミ論」。県内マスコミのほとんどの会社から講師の派遣を受けて実施するという他大学では例のない実施体制で行われている。

一見、キャリア教育とはかけ離れた内容にも思えるマスコミ論を取り入れたのは、マスコミの多様な視点が、マスコミ業界への就職を目指す学生だけでなく、これから社会に出て働く学生すべてに共通して必要、という考えからだ。マスコミ論では、マスコミの目を通して、学生の情報を読み解く力、地域社会や世界を見る目を育てる。マスコミ各社の意見にふれることで、学生は情報の多面性を理解し、自主的に自己の価値観を確立していくことができる内容となっている。そうした過程で、学生は自然と、自らの生き方や就職、職業についても考えるようになっていくというわけだ。

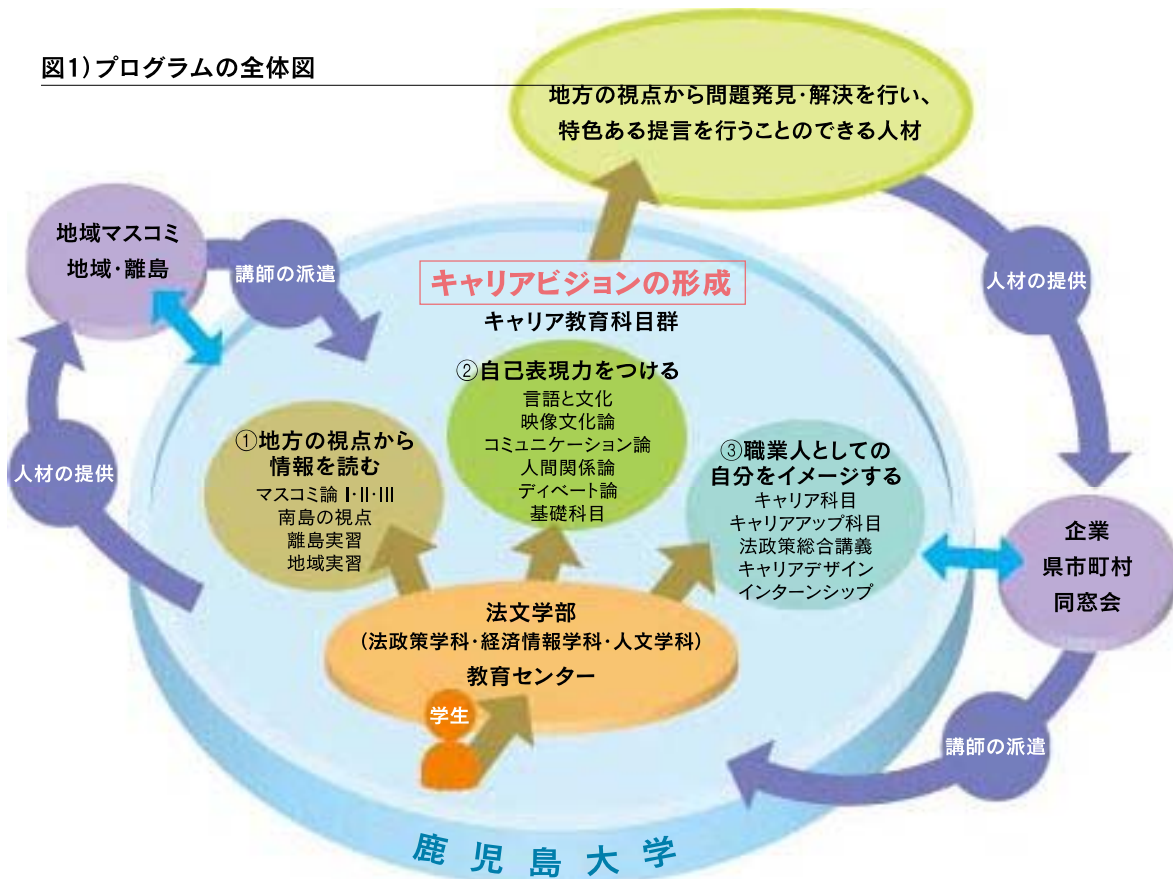
*1 ニート[NEET]

Not in Employment, Education or Trainingの略称で、仕事に就いておらず、教育や職業訓練も受けてない若者を指す。

*2 現代GP

社会的要請の強い政策課題(実践的総合キャリア教育の推進、知的財産関連教育など)に関する教育活動について支援するプログラム。

図1)プログラムの全体図



プログラムの3つの柱

プログラムは、3つの柱から構成される(図1参照)。学部専門教育とキャリア教育をバランスよく実施することにより、総合的な視点から物事を考え、提言できる人材を育てることができる。

①「地方の視点から情報を読む」法文学部はこれまで、地域のフィールドワークや実習を重視したカリキュラムを組んできた。それらを生かし、地域や島の視点から世界を見る目を養う。

②「自己表現力をつける」これまでも実施してきた科目を発展させ、論理的思考力やプレゼンテーション能力、言語表現力や映像表現力を向上させる内容となっている。

③「職業人としての自分をイメージする」県外で活躍する法文学部の同窓生や県内の企業・自治体職員、職業や労働に関する専門家などと連携した講義により、学生の職業

意識を高める。

学生の「考える力」を育てるモデル

法文学部では今後、大学院までを含めたキャリア教育を実現させたいと考えている。「文系の学生は、まだ社会からは職業上の専門家として見られていない。学生には大学で培った『考える力』をもっと社会で生かしてほしい。自分がどう生きるか、どう働くかを考えないと、何十年も働いていくことはできない」と木部学部長。今日の大学にはさまざまな役割が求められているが、その基本はやはり、「若者をどう育てるか」ということに尽きる。彼らが卒業後、何を考え、どう生きるか、どう働くかということが、将来の日本を左右する。法文学部のキャリア教育は、考える力をもった若者を育てる、一つのモデルとなりうるだろう。



「鹿児島大学法文学部公開討論会 ～個人情報保護とメディア～」(平成19年1月28日開催)のポスター。「マスコミ論」のまとめとして、社会へ向けても情報発信を行った。当日は、一般からの参加者も多数訪れた

鹿児島大学法文学部「地域マスコミと連携した総合的キャリア教育」ホームページ <http://www.leh.kagoshima-u.ac.jp/mass-com/mass-com2.html>

※「アラムナイ」とは英語で同窓生のこと。
各界で活躍する鹿児島大学の卒業生や
留学生などのユニークな活動を紹介します。

鬼塚さんが手にしているのは世界的に有名なエコノミスト、トム・ピーターズの本。同じ本をオフィスの本棚と自分の机、自宅の3カ所に置き、常に読めるようにしている。「僕の『勝負本』です。大仕事をする前には付箋を貼ったところをバーッと30分くらいで読み、モチベーションを上げています」

interview

Tadashi ONITSUKA

アップルシード・エージェンシー
代表取締役／作家エージェント **鬼塚 忠さん**

● profile

1965年鹿児島市生まれ。1984年鹿児島大学水産学部海洋社会学科入学。英国留学の後、1年半にわたる海外放浪。このときの体験をまとめた『メディナ ～アジア・中近東・北アフリカ旅行記～』を在学中に出版。1990年鹿大卒業後、2年間で世界40か国を放浪。旅行記の企画を南日本新聞社に売り込み、1991年から同新聞夕刊で「世界裏通りを行く」と題した旅行記を160回にわたり連載。1997年海外作家の翻訳版權エージェンシー会社「イングリッシュ・エージェンシー・ジャパン」入社。2001年10月日本初の作家のエージェント会社(有)アップルシード・エージェンシー設立。2003年株式会社へ改組。『海峡を渡るバイオリン』(鬼塚忠・岡山徹／聞き書き)、『考具』(加藤昌治／著)、『すごい会議』(大橋禅太郎／著)、『何のために生きるのか』(稲盛和夫・五木寛之／共著)など、10万部、5万部を超える多数のベストセラーを手がける。著書に『ザ・エージェンシー』(ランダムハウス講談社)。鬼塚さんやアップルシード・エージェンシーの仕事は、テレビ東京の番組「ガイアの夜明け」や「AERA」「ブレイン」など、数々のメディアで取り上げられている。



学生時代、放浪先のモロッコでストリートボクシングのチャンピオンと対決。「皆が息をのんで打ち合いを見ている。多分先の試合よりもおもしろいのだろう。自分でもそう思う。国際試合だからだ」(『メディナ ～アジア・中近東・北アフリカ旅行記～』より)

作家に“情熱菌”をうつすのが、作家エージェントの仕事です。

作家と企画とのぶつかり合いが面白い

作家のエージェントは、「芸能人のマネージャー」の作家版です。エージェントは、作家が執筆に専念できるように、出版社などとの交渉の窓口となって企画の売り込みや原稿料の交渉をするだけでなく、人と会って企画のネタを探したり、アイデアを出して企画を膨らませたりもします。そうやって作家に“情熱菌”をうつして企画への思い入れを強くさせ、一緒に本をつくり上げていきます。

この「作家と企画とのぶつかり合い」がいちばん面白いんです。本の出版までには、企画以外にも校正や紙の指定などたくさん作業がありますが、エージェントはその中のいちばん面白いところだけをやる。そこが編集者と違うところなんです。

今、契約している作家は70人ほど。私も含め、4人で年間約80冊の本を手がけます。60人の社員がいる出版社の年間に出す本が50〜60

冊ですから、その多さはわかっていただけだと思います。

サラリーマンにはなりたくなかった

大学生になってから、狂ったように読書をするようになりました。本田勝一や片岡義男などが好きで、ジャーナリストや作家に憧れたこともありましたね。サラリーマンにはなりたくなかったです。そのうち、「世界を舞台にした面白い仕事をしたい。それにはバイリンガルにならなくちゃ」と思い始め、サッカー部をやめて猛烈に英語を勉強しました。大学2年の夏からはロンドンの語学学校に通い、世界各国を旅しました。

卒業するころはバブル景気真っ盛り。交通費や宿泊費、食事代付きで試験を受けて簡単に内定がもらえたから、「人生楽勝だ」と思ってた。就職せず、卒業後も海外を放浪していました。帰国したら、金はないし職もない。学生時代に内定をくれた会社に行ったら、門前払いされました。オーストラリアを旅し

ていたころにアルバイトをしていた日系の新聞社で働こうとしたけど、今度はビザが下りない。

興味を持ってきたものがすべてその会社にはあった

東京でアルバイトをしたり、簿記・会計の専門学校に通いながらビザを待つうち、海外作家の日本語翻訳権を売る会社「イングリッシュエージェント」の求人を見つけました。本や英語といった、自分が興味を持ってきたものがすべてその会社にはあった。面白かったですよ。日本の誰よりもいち早く海外の作品に目を通し、その翻訳権を売る仕事に就いて「文化の輸入をしているんだ」と、充実した気持ちでした。

独立したきっかけは、フランク



鬼塚さんが手がけた本が並ぶ本棚。これまでに約250冊の本を世に送り出してきた(2007年1月現在)

フルトのブックフェアで「作家エージェント」という職業を知ったこと。作家と共に企画をつくり上げ、自分が納得する作品を世に送り出すことができるエージェントという仕事を、どうしてもやってみたい。やりたいうことを制限されるのはいやなので、自分でやるしかないと思い、会社を興しました。

適職なんて簡単には見つからない

適職なんて、社会に出る前から簡単には見つかりませんよ。私の周りでも成功している人や頑張っている人というのは、人生を深く考え過ぎず、自分の目の前にある面白いことを一所懸命やっている。そうすれば30歳までに適職は見つかります。学生時代に大切なのは、本を読む習慣をつけること。絶えず「面白いものを読みたい」という興味を持続させて、月5冊以上本を読む習慣があれば、年を取っても知的レベルはどんどん上がっていきます。

鹿児島には優秀な人が多いのに、勝負しようとしません。仕事や生活の拠点が鹿児島であっても、いかにして鹿児島でいいものをつくって県外と勝負するかといった、広い視点を持つてほしいと思います。



子どもたちには環境の話を変えながら、作り方を教えている。「海に落ちているゴミはひろえばゴミじゃなくなるんだね」、「子供と一緒に自然環境に対する意見を言い合える機会があって良かったです」など参加者からたくさん嬉しい感想を頂いている

手作りのキャンドルホルダーを使って
スロウな夜を楽しんでほしいです。



溝手克弥さん

農学部生物環境学科4年
森林管理学コース 育林学研究室
環境サークル「風伝(かぜのつて)」代表
[岡山県出身]



シーグラスは瓶などのガラスがごみとして海に流され、海流の中で磨かれて角が取れたもの

11月26日、かごしま県民交流センターで行われた鹿児島環境フェスティバル2006で、溝手さんはサークルの仲間とシーグラスを使ったキャンドルホルダー作りの環境教育ワークショップを行っていた。

「手作りのキャンドルホルダーを使って、キャンドルの灯だけでスロウな夜を楽しんでほしいです。電気を使わないことは温暖化防止にもつながりますから。まず節電を押しつけるのではなく、自分の作ったホルダーを使い、環境に配慮した暮らしの楽しさに共感してもらおう。共感から、自主的で持続する環境配慮型の暮らしにつながればと思います。もともと野生動物に興味がありサークルに入ったのですが、活動を通して人との出会いがきっかけで環境問題について、詳しく学びたいと思うようになりました」

鹿大や地域で勉強やサークル活動をする中で、環境問題に対する関心の的は増えた。卒業研究では京都大学にも協力してもらって、鹿児島島の酸性雨に対する森林の浄化能力を調べている。

「平成15年からは鹿児島市で行われている100万人のキャンドルナイトを企画しています。環境問題に積極的に取り組んでいる市議会議員と協力して、自分の意見を市議会で発言してもらったこともあります。ほかにもフェアトレード^{*1}を支援するボランティア団体を立ち上げたり、留学生と吹上浜で越境ごみ^{*2}を回収したりする中で、たくさんの人に協力してもらい、活動の輪は大きく広がりました。卒業後もずっと鹿児島で、出会った人々と協力して環境に携わる仕事をしたいと思っています」



ナナイロコトバ

「ご縁」

環境保護活動を通して多くの人と出会い、多彩な活動を企画することが出来るようになりました。これからもそういった人たちとご縁を大切にしていきたいです。

私の座右の銘

*2 越境ごみ
海流にのり、国境を越えて移動するごみのこと。

*1 フェアトレード
発展途上国に住む貧困層の人々の生活環境を改善するため、貧困層の人々の作った商品を適正価格で先進国と取引する貿易のこと。

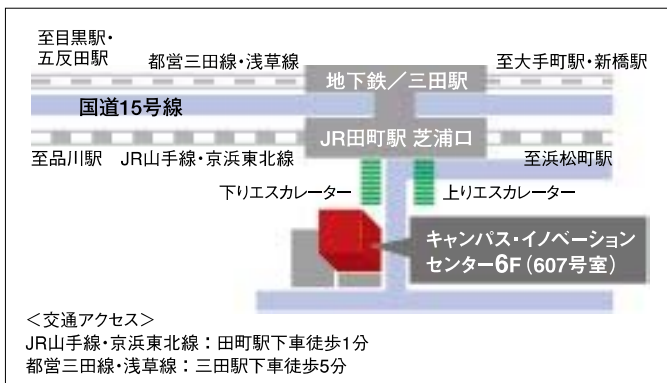
あゝ鹿大見て

鹿児島大学キャンパスあんなに
Welcome to our Campus



平成18年11月30日にリエゾンオフィスのあるCIC内で開催された「鹿児島大学産学官連携情報発信シンポジウム」パネルディスカッションの様子

東京における鹿大の情報発信拠点



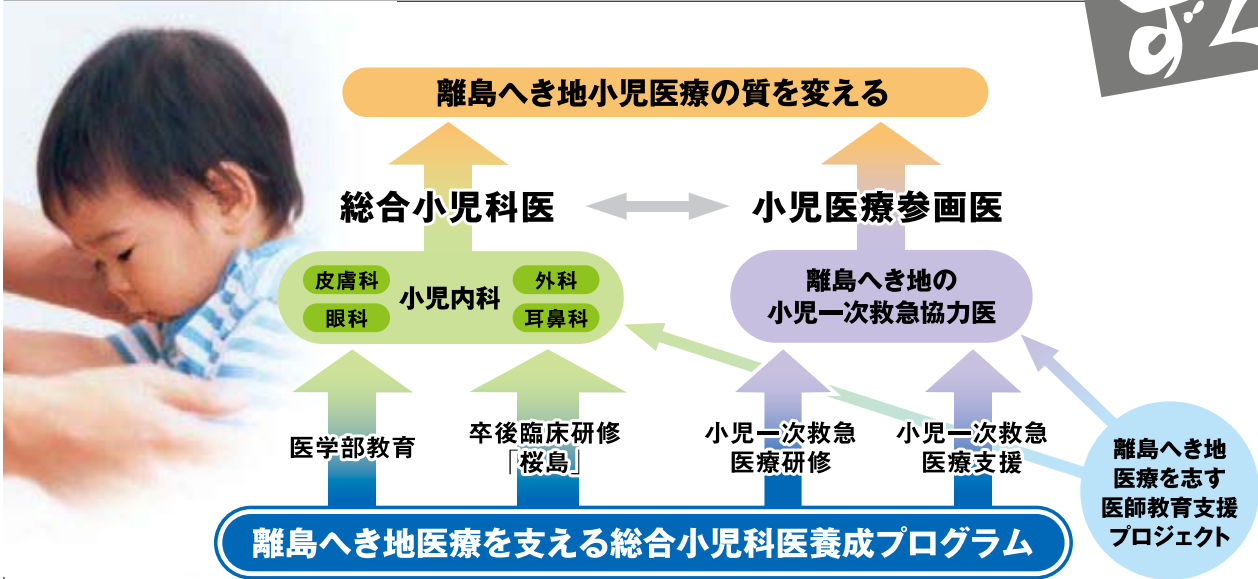
<鹿児島大学東京リエゾンオフィス>
 〒108-0023 東京都港区芝浦3丁目3番6号キャンパス・イノベーションセンター(CIC)607号室 TEL/FAX 03-5440-9099
 利用案内 URL http://www.kagoshima-u.ac.jp/tokyo_office/liaison.html
 開館：月～金曜日(祝祭日を除く) 10:00～17:00
 *リエゾンオフィス利用についての問い合わせは上記連絡先または、鹿児島大学総務課総務係 TEL.099-285-7030
 E-mail: ssoum@kuas.kagoshima-u.ac.jpまで

これまでに、CIC内にリエゾンオフィスを構える30数校の大学と合同で、学生のための入試説明会や就職説明会、企業向けの新技術説明会を行ってきました。平成18年11月30日には「鹿児島大学産学官連携情報発信シンポジウム」がCICの国際会議室で開催されました。関東地区から鹿大の卒業生を中心とする企業関係者ら100名以上が参加し、辰野裕一(文部科学省審議官)による基調講演「法人化後の大学に期待するもの」やパネルディスカッションが行われました。「このままでもいいのか! 鹿児島大学の産学官連携活動にも申す」と題したパネルディスカッションでは、参加者とパネラーの間で活発な意見が交わされました。

CICの会議スペースを使ってシンポジウムなどを行うこともできます。鹿児島大学東京リエゾンオフィスは鹿児島大学の教職員や学生であれば、どなたでも利用できます。皆様のご利用をお待ちしております。

鹿児島大学東京リエゾンオフィスは、鹿児島大学の教職員が大学の広報活動や情報の収集・発信を行い、教育研究や産学連携、就職支援の推進を図ることを目的として、平成16年11月に設置されました。リエゾンオフィスは、(財)国立大学財務・経営センターが管理運営を行っているキャンパス・イノベーションセンター(CIC)内にあり、スタッフ1名が常駐して鹿大に関する各種情報の提供などを行っています。テレビ会議システムが整備され、リエゾンオフィスと鹿児島大学の一部の施設とをつないでリアルタイムで会議を行うことも可能です。

「鹿児島大学東京リエゾンオフィス」



(図) プログラムの概要

鹿児島大学病院の「離島へき地医療を支える総合小児科医養成」プログラムが採択

小児医療の質向上を目指して

平成18年9月、文部科学省の「平成18年度地域医療等社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム」に、鹿児島大学病院が応募した「離島へき地医療を支える総合小児科医養成～総合小児科医と新たな小児科医療参画医が離島へき地小児医療の質を変える～」が採択されました。このプログラムは、小児医療に対応できる医師を養成し、離島へき地の小児医療の質を向上させるためのもので、2つの大きな柱から成ります。

総合小児科医と小児医療参画医を養成

1つめの柱は、「総合小児科医」の養成です。5年時にはじめて子どもと接する実習が実施されていたこれまでのカリキュラムを改善し、1年時から子どもと接する機会を継続的・段階的に取り入れます。子どもと接することで、小児医療のやりがいや重要性を実感させることがねらいです。さらに、卒後臨床研修においても、外科や眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科といった他の専門分野のノウハウも身に付けることができる小児科医のためのコースを新設するなどして、小児科以外の知識も併せ持った「総合小児科医」を養成します。

2つめの柱は、すでに現役の医師として離島へき地で働いている小児科以外の医師を小児医療に積極的に関わる「小児医療参画医」として育成することです。定期的な勉強会の機会を設けて小児医療の最新の知見について情報交換することによって、他科の医師であっても自信をもって小児の一次医療に関わることができるようにします。また、鹿児島大学病院が整備しつつある医用データ管理システムを利用し

てネットワーク内の医療機関同士がリアルタイムで遠隔診断ができる環境を整え、小児医療参画医を支援することも計画しています。

小児医療は「投資の医療」

プログラムの担当者である鹿児島大学病院小児医療センター長の河野嘉文教授は、入学時には学生の約4割が小児科への興味・関心を持っているといいます。「この中から本気で小児科医を目指す学生が残ってくれたらと思います。小児医療は『投資の医療』。小児科医が救った子どもたちは、その後何十年と日本を支えます。子どもの医療と教育は国の根幹であることも学生たちには伝えたいですね」と河野教授は語っていただきました。

このプログラムは平成19年度入学者から適用されます。文科省からの支援がある今後3年間でプログラムを軌道に乗せ、支援終了後も継続させていく予定です。

*「特定非営利活動法人(NPO)こども医療ネットワーク」は河野教授ら鹿児島大学病院の医師をはじめ、鹿児島県内の小児科医らを中心に離島へき地の小児医療を支援しています URL <http://www.kodomo-iryō.org/>



NPO法人こども医療ネットワーク「こねっと通信」の表紙

▶ かがしまルネッサンスアカデミーが開講



初回講義を行う原口泉法文学部教授

平成18年11月12日、かがしまルネッサンスアカデミーの開講式が行われました。かがしまルネッサンスアカデミーは、文部科学省の平成18年度科学技術振興調整費「地域再生人材創出拠点の形成」事業に採択

された、新しい教育プログラムです。鹿児島大学が、鹿児島県や民間企業と共同で、鹿児島県の食品産業や関連する業界、ひいては鹿児島県全体の活性化を目指し、「食の安全管理コース」「経営管理コース」「健康・環境・文化コース」の3つに分かれて人材を育成します。平成18年度は、書類審査を経た年齢20代から60代までの、職種もさまざまな54名の社会人が参加しています。

開講式では、永田行博学長(当時)、鹿児島県知事代理、鹿児島県酒造組合連合会の本坊喜一郎会長がお祝いを述べられた後、アカデミーの概要や各コースの講師陣の紹介、コースごとに分かれてのオリエンテーションが行われました。

午前11時からさっそく、原口泉法文学部教授による初回の講義「焼酎文化の歴史」が3コマ実施されました。原口教授は、「鹿児島県は生物・遺伝資源の宝庫。その資源を守り、生かすことで焼酎や黒酢のような食品づくりが可能となる。鹿児島県の産業や観光を発展させるためには、産業関係者だけでなく住民全体で環境保全から考えなければならない」と受講生に語りかけ、受講生は熱心に耳を傾けていました。

平成19年度の受講生募集は平成19年9月を予定しています。受講生募集については鹿児島大学学術国際部研究協力課(電話099-285-3229)までお問い合わせください。



平成18年度の受講生と講師陣

▶ シニア短期留学が開講

シニアと呼ばれる年齢50歳以上の方向け生涯教育プログラム「鹿児島大学シニア短期留学」が平成18年11月26日から12月9日までの2週間の日程で開講されました。この国立系大学としてNPO法人と連携した初の取り組みに、全国各地から12名が参加しました。

基本的に午前中は日替わりで鹿児島に関する自然や産業などさまざまな講義、午後はその日の講義内容にまつわる現地研修という独自のプログラムを考案し実施しました。通常学外者が入れない水産学部練習船「南星丸」や高隈演習林での現地研修のほか、鹿児島観光の名物である温泉をテーマにし

た講義など鹿大ならではの内容のプログラムが展開されました。

学生ボランティアが講義助手の協力をしたり、現地研修の一部をNPO法人かごしま探検の会へ委託することで、若者の育成も目的の一つとしています。

企画・運営を担当した生涯学習教育研究センターの松野修教授は、「今回は参加者に大学での学習や生活をどれだけ味わってもらえるかを追究しました。鹿児島の魅力を伝えるだけでなく、地元で活動するNPO法人と産学官が協力した新しい鹿児島観光プログラムの開発も目指しています。今回の参加者の声を次につなげていきたい」と話しました。



野呂忠秀教授の講義「鹿児島の海は牧場だった」の様子。南星丸上でプランクトンを採取・観察し錦江湾にすむ生物の多様性を学んだ



松野修教授の講義「温泉の分子模型作り」の様子。模型作りのコツを学生が伝授した

▶ 工業倶楽部賞・稲盛賞の受賞学生決定

『鹿児島大学工業倶楽部賞』

「鹿児島県地域産業の発展のために、技術・事業の高度化、産学官連携、地域の振興・活性化等のために貢献又は寄与」する優秀な研究業績を挙げた大学院学生として、大学院理工学研究科博士前期課程2年の日高隆太さん、大学院農学研究科修士課程2年の石川大太郎さんの2名が平成18年度「鹿児島大学工業倶楽部賞」を受賞しました。

この賞は、平成17年10月、県内の製造業など異業種237社で構成される(社)鹿児島県工業倶楽部と鹿児島大学が包括連携協定を締結したことを記念して創設されたもので、受賞者には同倶楽部から記念品が贈呈されます。

日高 隆太さん

修士論文テーマ

「電子デバイスのシーリングを目指した
ホウ素系鉛フリーガラスの開発」

受賞理由

本研究は、地元企業との共同研究であり、この研究成果は半導体レーザーキャップのシール加工に実用化され、またこの新規技術を審査付き研究論文投稿や特許出願するなど地域産業の発展に大きく寄与している。

石川 大太郎さん

修士論文テーマ

「リモートセンシングによる茶の生育・
品質推定手法に関する研究」

受賞理由

本研究は、リモートセンシング(遠隔探査)を用いた収量・品質判定結果を肥培管理情報・気象情報と有機的に解析することにより、農業生産性効率の向上、栽培技術革新を通じて、地域農業の高度化への貢献を目指したものである。この研究の一部は学会誌やハンドブックにも掲載されている。研究成果は、地域産業とりわけアグリビジネスの振興・活性化に大きく貢献している。

『鹿児島大学稲盛賞』

鹿児島大学稲盛賞は、平成16年度に稲盛和夫京セラ(株)名誉会長の寄附により創設された賞で、本学に在学する学生のうち、(1)学業に専念し成績優秀で品行方正な最終学年次の者、(2)社会の期待にこたえるような業績を挙げた者、(3)その他同等以上の表彰に価する行為等があったと認められる者を表彰するものです。

平成18年度は、各学部長から推薦のあった15名(下記)に対して、表彰状と記念品が卒業式にて贈呈されます。

平成18年度稲盛賞受賞者一覧

学部・学科等名	氏名
法文学部経済情報学科4年	松永 芙紗子さん
法文学部人文学科4年	川野 梓さん
教育学部養護学校教員養成課程4年	樋高 愛子さん
教育学部学校教員養成課程(音楽専修)4年	中村 寛治さん
理学部数理情報科学科4年	戸高 健輔さん
理学部地球環境科学科4年	岩尾 聡子さん
医学部医学科6年	梶 一晃さん
医学部保健学科4年	瀬海 由貴子さん
歯学部歯学科6年	富澤 大佑さん
工学部海洋土木工学科4年	久保 直哉さん
工学部応用化学工学科4年	中野 慎也さん
農学部生物生産学科4年	川口 友美さん
農学部獣医学科6年	村山 真紀さん
水産学部水産学科4年	庭山 直子さん
水産学部水産学科4年	竹本 牧さん



昨年度の卒業式で行われた稲盛賞授与式の様子

▶ 第2回焼酎学講座シンポジウム 「焼酎の時代」を開催

平成18年12月10日、鹿児島大学農学部焼酎学講座の第2回シンポジウム「焼酎の時代」が開催されました。朝から一般の方や焼酎業界関係者など、約270人が会場に詰めかけました。

シンポジウムでは、同講座の客員教授を務める小泉武夫東京農業大学教授が「焼酎の時代」と題した基調講演を行いました。日本人が焼酎を好む理由、原料であるさつまいもの問題、焼酎をめぐる環境問題などをわかりやすく解説しながら、「焼酎学講座では物づくりだけでなく、人づくりにも力を入れる。鹿大を焼酎文化の拠点とするため、『世界蒸留酒サミット』を鹿児島で実現させたい」と聴衆に語りかけました。



小泉武夫東京農業大学教授による基調講演

最後に、焼酎業界、国税局、新聞社からのパネリストと焼酎学講座の教員が参加し、「『さつま焼酎』の未来戦略 ～いも焼酎・黒糖焼酎の明日を考える～」というテーマの総合討論が行われました。いも焼酎や黒糖焼酎の現状、その目指すべき方向などについて活発な議論が交わされました。

農学部の焼酎学講座は平成19年4月から開講します。同年10月(後期)からは、農学部生物資源学科焼酎学コース3年の学生たちが新たに設置された研究室「焼酎製造学」と「醸造微生物学」に所属し、課題研究をスタートさせる予定となっています。



総合討論「『さつま焼酎』の未来戦略」の様子

▶ 「学生による離島・へき地医療フォーラム」を開催



下甌手打診療所と会場を光回線で結んだ質疑応答

鹿児島大学医学部の学生が中心となって企画した「学生による離島・へき地医療フォーラム」が平成18年9月16日、メディアポリス指宿で開催されました。医師や看護師、療法士などを対象とする県内外の学生や教員約80名が参加しました。

フォーラムでは、実行委員会が鹿大や他大学の医学科・保健学科生を対象に行ったアンケート「離島・へき地医療に関する学生意識調査の分析・評価」の結果を発表しました。離島・へき地で働いてほしいとする学生が約半数いるというデータなどが示されました。さらに、鹿大医学部で行われている離島実習や医療を支援するITシステムの紹介、光回線を利用した薩摩川内市下甌手打診療所の医師と会場との質疑応答、鹿児島県保健福祉部長の講演などが行われました。10月14日には9月のフォーラムを踏まえた学生討論が行われ、将来の医療を担う立場から学生たちが議論を交わしました。

フォーラムの代表発起人である中島一壽さん(医学科5年)によると、今回のフォーラムでは「学生だからこそ言える本音をぶつけて、離島医療の問題だけでなく、日本の医療や国の将来を考えるきっかけにもなることを目指した」とのことです。「『困っている人の力になりたい』という純粋な気持ちを持つ



10月14日に行われた学生討論

学生が多いことがアンケート結果から分かった。離島・へき地の医師不足は、住民と医師が歩み寄って解決できる問題だと思います」と感想を語ってくれました。

▶ 垂水市第4次総合計画策定に 鹿大が協力

鹿児島大学と垂水市は、平成18年10月18日、平成20年度からスタートする第4次垂水市総合計画策定にあたって、相互に連携・協力して同計画を策定するとともに、地域社会及び人材育成の発展に寄与することを目的として協定を締結しました。

総合計画とは、地方自治法第2条第4項に基づき、まちづくりの方針や総合的かつ計画的な行政運営を図るための基本構想をまとめるもので、鹿大が自治体の総合計画の策定に参画するのは初めてです。

垂水市は、今回、市民と一体となった総合計画を策定することを決定し、これまで防災に関する公開講座の開催や持続可能な開発のための教育プログラムの開発等での実績があった鹿大が、同計画策定面で連携協力することになったものです。



10月18日に垂水市役所で行われた協定締結式の様子

▶ 松岡達郎水産学部長が JICA理事長表彰を受賞

平成18年10月2日、松岡達郎水産学部長が「第3回国際協力機構（JICA）理事長表彰」を受賞しました。本表彰はJICAが行う国際協力事業に協力し、途上国の人材育成や発展に尽力した個人・団体の功績を称えるものです。

パプアニューギニアで約10年間の大学教員の経験をもつ松岡学部長は、特に教育分野での国際貢献に大きな関心を寄せ、研修事業など人材育成を中心とした国際貢献を長年行ってきました。パプアニューギニアでの第三国研修やJICA神奈川水産国際研修センター、鹿大水産学部での国際研修コースのプログラム設計や、トリニダードバゴでのプロジェクトにおける国内支援委員長としての活動などが、特に高く評価されています。



オープンクラスが実施された「鹿児島探訪・歴史編」
（講師は日隈正守教育学部助教授）

▶ 教養教育オープンクラスを実施

教育センターでは、共通教育棟（郡元キャンパス）で実施されるすべての講義を学内外の方に公開する「教養教育オープンクラス」を平成18年11月6日から9日にかけて実施しました。

FD授業改善活動の一環であるこの取り組みは、鹿児島の地域に根ざした高等教育機関として、学生だけでなく社会人や退職者など幅広い地域の人々に教育活動の一端を紹介することを目的として実施されたものです。

このオープンクラスには期間中、計23名の社会人が学生に混じって、教養科目の「鹿児島探訪」など、のべ82科目の授業に参加しました。



緒方貞子国際協力機構理事長から表彰状を受け取る
松岡達郎水産学部長

松岡学部長は「国際貢献ではプロジェクトの設計・実施・評価という3つの段階があり、これまでそのすべてに関わってきた。今後は、国際貢献で培ったノウハウを学内でも役立てていきたい」と話しています。

▶ 東ローマ帝国の農業書『ゲオーポニカ(Geoponica)』を発見

附属図書館では、農学部の前身である鹿児島高等農林学校の蔵書を整理中に、東ローマ帝国の農業書『ゲオーポニカ』の再版本(全4冊[20巻]、1781年刊行)が発見されました。

同書は、10世紀に東ローマ帝国の皇帝コンスタンティノス七世の命で編纂させたもので、気象、農事暦、ブドウやオリーブの栽培法、ワインの製造法、養蜂、牧畜等について、ギリシャ語の原文(ラテン語訳付)にて記されています。

現在原本は既に失われ、これに最も近い良本が今回のライブチヒ版とされています。

鑑定した教育学部の伊藤正教授(西洋古代史)は、「確認した限りでは国内唯一であり、世界的にみても稀少本。保存状態も良好であり、西洋古典学の研究にとって非常に有意義な発見」と話しています。



▶ 総合研究博物館常設展示室が国の登録有形文化財に

平成18年10月18日、鹿児島大学総合研究博物館の常設展示室建物は歴史的建造物として国の登録有形文化財になりました。

平成16年から展示室として使っているこの建物は、昭和3(1928)年に鹿大の前身の一つ、鹿児島高等農林学校の図書館書庫として建てられたものです。鉄筋コンクリート・2階建て・約100m²

の小さな建物ですが、鹿児島に現存する初期の鉄筋コンクリート建物であり、最も古い学校施設としても歴史的な価値を持っていることが評価されました。

鹿児島高等農林学校の建物はほとんどが木造であったため、昭和20年の鹿児島空襲で多くを失い、また戦後の新たな施設整備のなかで次々と姿を消して行きました。唯一、最後に残っているのがこの旧図書館書庫なのです。



総合研究博物館常設展示室

▶ 寄附講座「心筋症病態制御講座」を設置

大学院医歯学総合研究科は、東京都に本社があるジェンザイム・ジャパン(株)からの寄附により、平成18年11月1日に寄附講座「心筋症病態制御講座」を設置しました。

同講座の設置期間は3年間、寄附金は年間4千万円、総額1億2千万円となる見込みで、担当教員として、同研究科の教授(兼務)1名と特任助教授1名及び特任助手2名が就任しました。

同講座では、循環器領域の医療現場で大きな課題となっている心筋症の疫学、病態、診断と治療に関する研究を行うことにより、革新的な医療技術の進歩のみならず、社会への貢献を果たすことを目的とし、また、大学院等におけるカリキュラムの充実も図る予定です。

なお、鹿大の寄附講座は、臨床予防医療講座、医療関節材料開発講座、焼酎学講座に続き、4件目となります。



▶ わが国初の専門職大学院 「臨床心理学研究科」新設

平成19年4月に設置予定の鹿児島大学大学院臨床心理学研究科は、わが国初の学部を基礎としない大学院(独立研究科)であり、専門職大学院です。

専門職大学院は、従来の研究者養成を目的とした大学院とは異なり、高度専門職業人養成のための実務教育を中心に授業を行います。臨床心理学研究科では、不登校、いじめ、子育て支援、ストレス、職場の人間関係など、複雑かつ多岐にわたる国民のこころの問題に即応できる、高度な臨床心理士養成を目的とします。

本研究科では、臨床心理学を研究分野とし、個別支援、集団支援、地域支援、危機介入支援のできる人材並びに地域文化を視野に入れた心理臨床ができる人材の養成を教育理念とし、この理念に基づいて養成された人材を輩出することにより、国民のこころの健康に寄与します。

また、社会のニーズに即応できる臨床心理士を養成するために、2年間にわたる「心理臨床相談室」における学内実習及び学外実習と、個別・少人数指導による教育体制を設定し、教育、福祉、医療、司法・矯正領域を充実・強化した教育課程を提供します。この教育課程を実現するために、教員組織は5名の教育研究教員と臨床経験豊富な4名の実務家教員から構成されています。

入学定員は15名であり、修了生は地域文化を視野に入れた優れた臨床実践能力を基に、鹿児島県内だけでなく全国各地域で活躍することが期待されます。

お知らせ

●施設貸出のご案内

鹿児島大学では、大学内の一部の施設の貸出を行っています。

詳細については下記URLをご参照ください。

・会議室・講義室等の貸出について

<http://hh.kuas.kagoshima-u.ac.jp/jkoukai/sonotasiseturiyo.pdf>

・稲盛会館の貸出について

<http://www.eng.kagoshima-u.ac.jp/%7Ejimu/inamori.html>

●鹿児島大学インフォメーションセンターがオープン

大学と地域社会を結ぶ大学情報の発信および交流の拠点として、平成19年4月、大学正門付近に「インフォメーションセンター」がオープンします。大学の概要や広報誌等の提供、各種イベントの案内、研究成果物の展示などを行います。



インフォメーションセンター(右の建物)の一般道から見た完成予想図

■行事予定(2007年3月~7月)

皆様方のご来場をお待ちしております。

外国人留学生によるポスターセッション(留学生センター主催)

平成19年7月24日(火) 14時~16時

稲盛会館(ロビー)

お問い合わせ▶留学生課留学生企画係 ☎099-285-7325

編集後記

平成19年1月、鹿児島大学長に吉田浩二氏が就任し、本学は新体制のもとでさらなる発展の歩を進めています。吉田学長は、大学全体が共有する「鹿児島大学のブランドデザイン」を創造することを力強く表明しています。

学長の考えの基調は、鹿児島の地域性を重視して「鹿児島とともに」にあること、大学の使命である教育、研究のあるべき姿を本学の全構成員とともに問い直すこと、にあるようです。これらが「ブランドデザイン」として結実すれば、本学の基盤は磐石なものになるでしょう。

鹿大はまもなく数多くの新生を迎えます。希望に満ちあふれた新生たちの期待に十分に応え得る大学でありたいと思います。

広報誌等編集専門部会部会長

中島あや子



(表紙イラスト)

●扉を開いて

鹿児島大学に春がやってきた。キャンパスには新生の姿があふれ、大学は活気に満ちている。彼らの手ににぎられているのは、未来へ続く扉の鍵。さあ、その鍵で扉を開いてみよう。扉の向こうには新体制のもと、さらに飛躍しようとしている鹿児島大学が待っている。